



# 夢、夢、夢を追う！ 「高圧ポンプ」技術で 日本の支えとなれ

ありみつ ゆきしげ  
有光 幸茂 (1890~1972年)



## ■有光工業 株式会社

本社所在地：大阪市東成区深江北1-3-7 従業員数：250名 資本金：1億5,000万円  
創業：1923(大正12)年4月  
事業内容：高圧ポンプ・洗浄機・防除機等の製造販売

## 幼心に芽生えた「外国」への憧れ

**愛** 媛県の県名の由来である愛比売命（えひめのいよずひこのみこと）が祀られる伊豫豆比古命神社（通称：椿神社）のお膝元・松山市居相にて、1890(明治23)年、後の有光工業(株)創業者・有光幸茂は一家の次男として生を受けた。

幼少の頃より海外への強いあこがれを持っていた幸茂は、愛媛県立農業学校在学中に外国船へ忍び込んで渡航を企てるような型破りな青年であった。結局、その時は船員に見つかってしまい、強制的に家に帰されることとなったが、それでも海外への夢を捨てきれず、1907(明治40)年、学校を卒業後には海軍へ入隊することとなる。その後、当時としては超難関であった海軍機関学校に入学を果たし、機械工学・科学技術・設計といった幅広い知識を修得していった。同校を卒業した1915(大正4)年、日本は連合国側として第1次世界大戦に参戦しており、幸茂も過酷な時代の流れに翻弄されながら、軍人としての自らの役目を果たしていく。

戦時において功績を残した幸茂は、従軍記章・勲七等瑞宝章を下賜されるなど軍人として高い評価を受けていたが、第一次世界大戦終結後の1919(大正8)年、軍籍を退き機械系の技術者として民間で働く道を選んだ。はじめは神戸三菱造船所（現三菱重工(株)神戸造船所）で船の機関製造に携わり、その後は森田ポンプ（現(株)モリタホールディングス）に移り消防ポンプの生産販売を行った。日本でトップクラスの技術を誇る企業で修業し、やがては自らの手で事業を興すことを人生の新たな目標に据えてのことだった。自分の腕に確固たる自信をつけた幸茂は、1923(大正12)年、33歳で大阪市西区阿波座に有光製作所を開設し、農機具等の開発をスタートした。

## ポンプ開発へ至るまで

**当** 時、産業界最大の関心事のひとつは、いかに高効率なエンジンを開発するかであった。幸茂も、その潮流に乗ろうとエンジンの開発を手掛けた時期があった。焼玉エンジンの改良やディーゼルエンジンの研究など、開発テーマはどれも先進的なものであったが、なかなか思う様な製品ができず、経済的苦境に立たされたことから事業化を断念することとなった。目指すべき方向を失い、あらためて自分に何ができるかを考えた幸茂の頭の中には、修業時代に携わったポンプ技術のことが思い出されていた。



1951(昭和26)年頃の幸茂(後列右)とその家族



戦前の有光製作所の外観

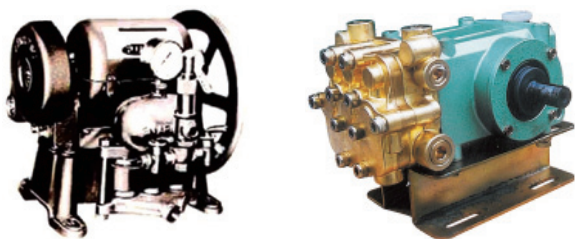
## 比類なき反骨精神の隣で

エンジン開発を断念した幸茂は、その後すぐさまポンプの研究に打ち込んでいく。全身全霊をかけて取り組んでいたエンジン開発を諦めざるを得ない状況となったにも関わらず、すぐさまポンプという次の目標を見つけ努力を重ねることができた幸茂の反骨精神には感服するばかりだが、幸茂の娘婿であり、後の有光工業(株)第2代社長・有光聿郎氏の著書からは、幸茂の人となりについて別の一面を垣間見ることができる。

——（先代は）人間的には非常に豪快で、（中略）さっぱりした性格の人でもありました。事業が軌道に乗るまでにはいろんな失敗があったようですが、そういうことをくどくど言わない人でした。立派な態度だなと思いましたが、逆に言う諦めるのが早いんですね。ダメだと判断したらすぐにやめてしまう。だから、長所であると同時に短所でもあったと思います。（中略）その代わりに、新しいことには何でも積極的に取り組む人でした。だから、いろんなものを開発することができたのだと思います。

## 業界での確固たる地位を確立

ポンプの開発に注力した幸茂は、1928(昭和3)年、日本で初めてとなる小型三連式高圧プランジャポンプを開発した。この製品は、従来品に比べ格段に安定した圧力調整が可能となった画期的なものであり、果樹園芸の防除や自動車・汽車等の洗車など多岐にわたる現場で重宝され爆発的なヒットとなった。また、1934(昭和9)年には全国農機具共進会の最高賞である銀牌にも選出され、「動力噴霧機の有光」として業界から大きく注目されるとともに、朝鮮半島・中国・台湾・東南アジア等へ販路を拡大していくきっかけともなった。



当時の三連式高圧プランジャポンプ(写真左)と、現在販売されているプランジャポンプ(写真右)

## 戦火の中で輝く経営の信念

こうして業績を好調に伸ばしていった有光製作所は、1935(昭和10)年に事業拡張のため現在地である大阪市東成区に工場を新築し、農用動力噴霧機や各種高圧ポンプの製作に専念する体制を築き上げることとなる。しかし、それから6年後、日本は第二次世界大戦に参戦し、国内は軍事一色に染められる。有光製作所と幸茂もまた、混迷の時代の中で苦しい日々を過ごすことを余儀なくされていった。

戦争により、まず影響が出たのは資材の確保であった。国による配給制が敷かれ、一社のみで時代の難局を乗り越えることが難しいと判断した幸茂は、同業他社に呼びかけて大阪重農機(株)を共同設立し、業界全体での資材確保に注力した。また、海軍時代の伝手を活かして、軍部から直接仕事を受注するなど、少しでも安定的な経営を行えるよう明日の見えない時代の中で奔走し続けた。

1941(昭和16)年からは、特殊潜水艦用ポンプや消防用ポンプといった軍用品の製造にさらなる協力をせざるを得なくなり、有光製作所を有光軍需(株)に改組した。しかし一方で、自社の基幹と位置付けた農用機械だけは絶やさず製造を続けていた。戦況が悪化するにつれ、ガソリンを使う農業用ポンプに対して、役人から「君の会社の製品はガソリンを使うのだろう。ガソリンは軍にとっての重要物だから、農業などで使われては困る」などと批判を浴びることもあったが、『食糧がなかったら戦争には絶対に勝てない。戦争で人手を取られるなか、農業機械は今後ますます必要になっていく』という強い信念をもって製造を継続していった。



昭和20年代頃の工場での検査風景



## 戦後、農機メーカーとして再建

1 945(昭和20)年の夏、長きにわたる戦争が終結した。混乱した日本社会と同様に、戦争は有光製作所にも深い爪痕を残していった。1941(昭和16)年に建設された新工場は、軍の情報を持っていて集中的に空襲にあったほか、働き盛りの若手社員たちが招集礼状を受け戦地に派遣されていった。

戦後、焼け野原のような大阪の惨状を目の当たりにした幸茂は、あらゆるものが不足していた終戦直後の社会においても、まずは食糧を満たすことが先決と感じていた。そこで、社名を「有光農機(株)」へと変更し、まずは循環式精米機の製造に取りかかった。しかし、当時は戦時中以上に物資の確保が難しく、金属の薄板一枚を手に入れるのに東奔西走せざるをえない状況であった。

状況が若干の落ち着きを取り戻し、国からの配給が始まると、幸茂はすかさず動力噴霧器の生産を再開させた。これは、農業の機械化推進の流れとGHQによる病害虫対策が本格化するという情報を得たものだった。はじめは国からの受注が相次ぎ、次に都道府県単位での購入、最終的には農家個人での購入へと広がっていくなど、動力噴霧器を使った田畑への農薬散布が加速度的に普及していくとともに、「有光」の名前は再び農機メーカーとして広く認知されていくこととなった。

また、農業機械以外にも、社員のアイデアから生まれた醸造樽用高圧洗浄機をはじめ、造船・鉄鋼・石炭・紙パルプといった業界へも、同社のコア技術である「高圧ポンプ」を使った製品は活躍の場を広げていった。



醤油樽の清掃から始まった高圧洗浄機の開発  
実家で醤油の醸造を行っていた一人の従業員が、水圧で醤油樽の汚れを落とせないかと考え、試作機を作ったことが、後に会社の売上の柱となる高圧洗浄機開発のスタートだった。

## 誠あれば商いは

人として豪快でユーモアに溢れていた幸茂であったが、仕事に対する考え方や取り組みは実直そのものであった。有光製作所を興し、経営者として様々な交渉や営業活動に多忙を極めるようになってからも、下駄履きで忙しく動き回る幸茂の足音は、毎日のように工場内に響きわたっていた。また、深夜にも自室でレコードをかけながら一人で製図を引く姿を家族はよく目にしたという。他人が休んでいる間にも努力を惜しまない姿勢を見た従業員たちは、そんな幸茂に大きな尊敬と信頼を寄せ、ともに「有光」を大きくしていこうと汗を流した。

従業員とよく飲みに出かけていた幸茂は、自分の夢やアイデアを部下たちに語って聞かせたという。戦後の焼け野原を目の前に『何よりもまず食糧を満たさねば』と誓った幸茂の夢は、有光工業の製品となって、今では中南米をはじめ中国、東南アジア、中近東、ヨーロッパなど世界各地に広がっている。



ブラジルでの販促活動

同社は1954(昭和29)年から南米向けに製品を輸出している。以降、アジア・ヨーロッパなど、農業大国と呼ばれる多くの国で有光の製品は使用され、各国でその性能を高く評価されている。



海外での研修の様子



様々な業界に広がる有光工業(株)の技術